地域社会と青年教育

―鹿児島県青年会館を訪れて―

文学部人間関係学科
教授　篠藤　明徳

ドイツ人学生（右）と談笑する松下育郎理事長、池水聖子事務局長

鹿児島県では、消滅したかに見えた「青年団」がまだ生き生きと活動しています。今回、一般財団法人・鹿児島県青年会館の理事長である松下育郎氏、同青年問題研究所の事務局長である池水聖子氏にインタヴューしました。

はじめに

青年団は明治以降、日本各地に結成され、大学生などわずかを除き、青年は皆んな青年団員でありました。戦後も高度成長以前は各県で何万人もの青年が加入する組織でした。しかし、高度成長以降、急速に衰退しました。

かつて、村々、地区毎にあり、夏祭りなどを担っていた青年団は、何故、これほど衰退したのでしょうか。私が小学生の頃、つまり、東京オリンピックが開かれた1964年ごろ、別府駅から歩いて５分のところにあった実家近くでも青年団は活躍していました。近くのお寺で毎夏開かれていた盆踊りでもその準備の主役は青年団でした。

しかし、産業形態が第１次産業から第３次産業に急速に転換し、それに伴い、田舎から都市へ若者人口が移動しました。また、分業化に伴い、地域共同体への帰属意識が希薄化したことなど、衰退について多くの理由が論じられてきました。また、最近は、SNSなどインターネットの普及で、隣人との関係すら希薄化しているとも言われています。

他方、災害の続いた平成も終わりに近づき、災害時に命を繋ぐのは、地域の絆、隣人の力であるとの認識も高まっています。また、学校も地域に開かれたコミュニティ・スクールが望まれ、「地域の教育力」も言われています。本稿では、鹿児島県の青年団の現状を学び、別府大学の青年団にも言及しながら、こうした「地域の人間関係力」を育む意味について考えたいと思います。

① 鹿児島県の青年団の現状

池水聖子氏は、もともと建築学を学び、その分野で働いていましたが、現在は郷里に戻り、鹿児島県青年会館の事務局に勤めており、2014年より鹿児島大学大学院教育研究科で「鹿児島県の青年組織と地域文化の継承」に関する研究を進められました。同県の社会教育委員会委員を務めるなど、県内の社会教育分野で活躍しています。同時に、青年会館に事務局を置く鹿児島県青年団協議会のサポートを含め、松下理事長を支えています。

上記の研究の中で、池水聖子さんは、2014年、鹿児島県の青年組織の実態を調査しました。県内43市町村の教育委員会等の所管課に対して行われたものです（以下、池水、農中論文参照）。調査報告で「青年組織」となっているのは、ほとんどが「青年団」という名称を使っていますが、いちき串木野市などでは、「羽島青年学級」「本浦青年交友会」「市来若者隊」という団体名になっているからだと思われます。

鹿児島県の場合、戦後の最盛期には15万人を誇っていました。1960年の段階で24,150人、1975年でも１万2140人の団員がいたと言います。しかし、2008年には1649人に減少しました。現在、団員も1806人に増加していますが、横ばいの状態です。

鹿児島県でも平成の大合併があり市町村の数は大きく減少しましたが、近年、地域づくり、若者の集う場づくりなどを目的に、新しく青年団が結成されたところもあるといいます。その一つの例として、さつま町青年団をあげ、昨年11月１日に発行された「青年団 TIMES」を見せていただきました。そこには、「泥んこバレー」「夏祭り」「クリスマスでのサンタ」など多彩な活動が紹介されています。こうした青年団の新しい様子は、地元新聞である南日本新聞の一面で大きく紹介され（2018年９月２日朝刊）、大きな話題になっています。現存する38団体のうち、22団体は合併前後に設立されていることもわかりました。池水さんは、こうした現象を「新たな組織として生成（再構築）している」と表現しています。

各団体の団員数は20～40人、男女比は２：１、年齢層は多くが21歳から30歳です。主な活動は子供に対する活動、イベント主催、ボランティア活動、スポーツ交流などです。地域の祭りや最近はハロウィンなども行なっているようです。しかし、青年団は、かつて伝統芸能の担い手として大きな役割を果たしてきましたが、現在取り組んでいる団体は、４割に満たないということです。

そして、何よりも池水さん、松下理事長が懸念するのは、青年組織として持ってきた学習機能が低下している、ということです。そこで、現在の青年会館・艸舎を新しく建設した2001年から力を入れているのは、「地域再発見のための読書活動」です。はじめは、鹿児島にゆかりの作家などを取り上げ、朗読劇、文学散歩などをしていました。2012年からは、離島も視野に入れ、地域の昔話を取り上げてきたと言います。昨年は青年会館・艸舎を飛び出し、種子島で行いました。こうした活動に取り入れているのは、講演とともに、若者が読書活動を実践的に身につけるようなプログラムであると言います。例えば、日頃子供達にわらべ歌や読みきかせをしている方々に半日かけて指導していただき、参加した人々もできるように練習をします。また、松下理事長は、こうした読書活動を実施する研修会を企画、運営すること自体が、若手リーダーを育成する貴重な機会になると話しています（以上、松下論文参照）。

② 地域における青年教育の課題

池水氏は、鹿児島県における青年団の課題として、まず、若者が流出し、減少する中で、団員確保が難しく、一部の自治体では、自治体職員が半ば強制で参加している場合もあると指摘しています。また、地域の様々な事業に「地元の若手」として引っ張り出され、活動が多忙化する面も多く、事業消化型、請負型とも言える活動が見られると述べています。そして、何よりも、「十分な学び」の場になっていないと指摘しています。

1970年代に青年団活動を分析した那須野隆一氏は、「共同学習」を発展させる「たまり場」に注目したと、池水さんは述べています。毎年３月に

鹿児島県青年会館“艸舎”

日本青年館で行われる全国青年問題研究集会では、全国から集まった青年が、それぞれの地域で行なった活動や日々の生活を通して感じたこと、考えたことを持ち寄り、２泊３日のスケジュールで議論を深めています。参加するに当たり、それぞれがレポートを提出し、そこで書かれた内容をテーマ別に分類し、７人くらいの小グループで３日間、議論を尽くしていきます。その際、各グループに青年団の先輩や研究者が助言者として参加しますが、決して議論をリードすることはしないということです。あくまでも青年たちの言葉、語りを中心に話し合いが進み、自分たちが考えた結論が出るように見守ります。これが、長年青年団で培ってきた「共同学習」です。もちろん、寝食を共にするのですから、各地の名物や地酒なども楽しみながら、夜の更けるまで暑い議論を戦わせます。

鹿児島県の青年団活動において、こうした「たまり場」としての青年会館の機能と、「共同学習」としての「読書活動のための研修会」など、地域に暮らす青年たちの連帯、学習を支援してきた鹿児島県青年会館の役割はとても大きいと感じました。

地域の多様化する青年活動

池水さんの調査では、社会教育課など、青年団などを伝統的に所管していた課を対象に行ったため、地域の「青年組織」という時に、青年会議所や商工会議所・商工会青年部などが入っていません。

すでに述べましたように、60年代の高度成長以降、１次産業が急速に衰退し、２次、３次産業に転換していきました。私の生まれ育った別府は当時、大観光地で街は観光客で溢れていましたが、駅裏には水田がありましたし、商売といってもほとんど自営業でした。また、鐵工所なども家内工業です。ですから、60年代までは、都市部でも地域密着型だったわけです。しかし、その後、学歴社会が進行し、ほとんどの人々が地域を離れ、会社に就職するようになりました。ここに、地域社会と青年の結びつきは難しくなっている原因があります。

しかし、子育てなど生活圏でしか解決できない課題が増加し、大都市部を中心として、コミュニティ政策が言われ、生活協同組合運動や様々な生活課題に取り組む組織もできてきました。また、青年会議所や商工会議所の青年部などが、「まちづくり活動」に熱心に取り組む事例が多々あります。青年に限定されませんが、NPO法人の地域活動も盛んになっています。

現在「働き方改革」がいわれていますが、過剰な労働時間からもう少し自由になり、男女が共に

働き、子育ても共同してできる社会に転換しようとしています。そうしなければ、日本の将来はありません。賃金と結ばれる労働からもう少し自由になる、これからの社会において、共同社会でのつながりの力を、どこで、どのようにつけるのかが問われています、この場合、異業種、異世代の交流する力でもあります。青年団の教育として育まれてきた共同学習では、地域の問題を自ら見付け出し、解決策を考え、仲間として実践していきます。こうした「青年教育」こそ、青年団が培ってきた力であり、これからの社会にますます必要なものとなります。

③ 別府大学青年団の活動と意義

別府大学には青年団がありますが、大学に青年団が初めてできた事例として注目されています。現在の団長は４代目で、文学部人間関係学科の学生である下鶴賢太郎君です。彼は鹿児島県の出身で、郷里にある青年会館を訪れ、松下理事長に色々な話を伺っています。

別府大学に青年団ができたのは、全くの偶然でした。大分県連合青年団の団長を経験し、現在でも、青年交流祭の運営などに尽力している板井泉一さんの甥である板井清成君が別府大学文学部人間関係学科に入学したことがきっかけでした。私自身、青年団活動をしたことはありませんが、親しい友人が青年団に関わる仕事に長年従事していますので、強い関心を持ち、顧問を引き受けました。しかし、学生サークルですから、何をすべきかなどは一切言及しません。ただ、彼らの活動を観察していますと、興味深いことが多いです。

私の研究室を「別府大学青年団事務所」としていますが、毎週水曜日の昼休みに集まり、会議を開いています。各自が思いつく活動をそれぞれ提案します。例えば、「あしなが募金の協力」、「聴覚障がいの方とともに海岸清掃活動」、「知事と対話をする青年交流祭の企画・運営」などなど、提案は全く自由です。しかも、参加するかどうかも自由で、そこで希望者を募り、会議に参加できなかった学生にはラインなどで連絡しているようです。その結果、５、６人が参加し実施することも多いようで、「緩やかな組織」という感じです。でも、地域に出て、自分たちが大切であるという活動を企画したり参加したりすることがこれまで続いてきたということに驚いています。

地域社会と大学

大学でも現在、「地域貢献」「地域活動の大切さ」が言われています。あまり好きな表現ではないですが、「ローカル大学」の使命としてよく言われることです。ただ、この場合、大学の「専門的な優れた知」を地域社会の発展に活用してもらう、という意味が大きいと思います。また、地域社会の要望として学生のボランティア活動もあります。しかし、私はこういう視点ではなく、学生が「地域」に学ぶということはないのか、その場合、何を学ぶのか、また、それを「教える教師」とはだれか、を問題にしたいのです。

本号の冒頭に「新学長に聴く」という企画を立て、インタヴューをおこないましたが、その中で、飯沼新学長は、「大学と地域社会の連携」について、大変興味深いことを述べました。大学の専門知による地域活性化はよく言われますが、「学生は地域に出て多くのことを学ぶことができる」という点です。飯沼先生自身が歴史学者として、歴史文書を根拠に歴史を考察してきましたが、荘園調査の為、国東半島の村々を回る中、古老が村の祭りや生活の中にある風習、古い地名などを語るとき、文書では把握できないことを多く学んだと言います。生活空間に織り込められた多様な「知」があるのです。それを「生活知」「生活世界」と呼んでもいいのでしょうか。分化された専門知とは異なった「生活知」の世界です。また、実生活で獲得された「生きた智慧」を大学教育に組み込んでいくことも大切であると言います。職業、年齢、学歴、ジェンダーなど多種多様な人々が生活する地域社会。その人間関係をどのように結んでいけるのか。ある分野の知的専門家である大学教員がそれを担えるのでしょうか。それは無理です。であれば、地域社会でそのような活動をしてきた方々、例えば、松下育郎さん、池水聖子さん、板井泉一さんなどに指導して欲しいと私は思っています。

大学は、学部学科に分かれ、高度化した専門知を身につける場です。そこで得た知識や知的作法を分業化した職業生活に生かして生きます。しかし、人間はそうした知だけで生きてはいけません。生活者としての知恵、能力はどのようにして身につくのでしょうか。現在、同世代の半分以上が大学に進学するようになりました。専門学校や短大を含めると８割を超えます。学校教育を受けながらも、かつての「青年団」のように、自分が生活する地域の仲間と共に学び、共に責任を持ち実践する力をどこかで同時につけなければいけません。「大学青年団」もその一つであると思います。大学に青年団が続々とでき、地域社会の中に学生が出て行き、青年会館や公民館で、地域の人々と車座になり、時には、夜を徹し、地域の料理やお酒を飲みながら、課題を議論し、共に実践することが起きたら、学生教育にとっても、地域活動にとっても、これまでとは全く異なった意味が見出せるでしょう。

地域に育てられる学生

今年も２月23日（土）、大分市にあるコンパルホールで「青年交流祭」が開かれました。今年で17回目です。これは、先ほど述べました板井泉一さんを中心に開かれてきた集会ですが、毎年、知事も出席し、青年たちの意見を聞きコメントを言われます（今年は副知事が参加しました）。最近は、大分市長も参加します。その後の交流会にも参加し、青年たちと話し続けています。実行委員会が準備をするのですが、ここ数年、別府大学青年団が中心となっています。彼らは夜遅く集まり、会合を重ねながら企画し、当日の運営を担います。一昨年、昨年は別府大学生が実行委員長も務め、全ての運営に責任を持ってきました。こうした活動をしたからといって、単位が出るわけでもありませんが、傍で観察すると、彼らがどんどんと力をつけ、自信を持っていくように感じます。知事や市長の前でも何ら屈託無く話している姿を見ると、感慨深いものがあります。

おわりに

鹿児島県青年会館では、年２回、県下の青年団のリーダーが集い、宿泊研修会を開催しています。今年も６月に開催されるということで、別府大学青年団の学生が参加を希望すれば、ぜひ受け入れたいという申し出がありました。情報化、経済の広域化が益々進む中、「地域社会の意義」を学ぶ上でも、貴重な機会になると思われるので、青年団の学生に打診してみたいと思います。

大学の枠を飛び出て、地域の青年と交流する中で育つ力、地域の絆力ともいえるものは、大学のカリキュラムの中でではなく、地域の人々との触れ合い、実践する中でしか育ちません。こうした活動を一大学教員としてしっかり見守りたいと思います。

参考文献：

・池水聖子、農中至（2017）、「鹿児島県の青年組織にみる社会教育の現状―青年教育の学びに実践に関する調査分析―」、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
・松下育郎（2018）、「若者たちと読書活動を通じて地域を再発見」（「読書推進運動」所収）、公益社団法人・読書推進運動協議会